

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第200次)

記者発表資料

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

※ 現地説明会を10月6日(日)に実施します。説明は、11時00分・13時30分よりおこないます(少雨決行)。

※ 駐車場はありません。

所在地：奈良県橿原市高殿町

調査面積：1179㎡

調査期間：2019年4月23日～継続中

【概要】

藤原宮大極殿院東北部の内庭および東面北回廊を調査し、回廊の柱位置を確認したほか、造営期の溝を検出した。さらに、東面北回廊から西にのびる(仮称)大極殿後方東回廊を初めて発見し、この回廊と重複して大極殿の北を東西にのびる掘立柱塼を検出した。これにより、大極殿背後は大極殿後方東回廊や掘立柱塼によって区切られていたことがあきらかとなった。大極殿後方東回廊の発見により、藤原宮大極殿院の構造および古代宮都の今後の調査研究に関して、重要な所見を得ることができた。

1. 調査の経緯と目的

大極殿院は藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約120m、南北約165mの空間である。その中央には即位や元日朝賀などの儀式の際に天皇が出御する大極殿がある。

大極殿院は戦前に日本古文化研究所が大極殿、大極殿院南門、回廊の部分的な調査をおこなひ、復元図を作成している。奈良文化財研究所は日本古文化研究所の復原案を検証するため、

1977年度に大極殿北方（藤原宮第20次）、大極殿院西門（第21次）の調査を実施した。近年は大極殿院の様相解明を目的として、回廊ならびに内庭部の調査を継続的に進めており、2001・2016年度に東門および東面回廊（飛鳥藤原第117次・第190次）、2007年度に南門（第148次）、2009年度に南面回廊（第160次）、2017年度に回廊東北隅（第195次）、2018年度に北門および北面回廊（第198次）の調査を実施してきた。これらの調査成果により、大極殿院各門の規模と構造があきらかとなるとともに、大極殿院内庭部分は最終的に礫を敷いて整備されていることが判明した。また、大極殿北方や南門の調査（第20次・第148次など）では、宮造営の資材を搬入する目的で宮中心部を南北に縦貫する形で設けた運河SD1901Aの存在があきらかとなった。さらに、南門周辺および朝堂院朝庭の調査（第153次・第160次・第163次・第186次）では、大極殿院南門の建設開始により、この運河から派生して、東へ迂回して北へとのびる南北溝SD10801Bに付け替えることで、水流の調整や排水をおこなったことが判明するなど、藤原宮造営時の様相も解明してきた。

今年度は東面北回廊の規模と構造、および大極殿院内庭部の整備状況の様相解明を目的として、大極殿院東北部の調査をおこなった。なお、調査区西部は第20次調査区、南東部は第117次北調査区と一部重複する。

2. 調査の成果

(1) 藤原宮期の遺構

東面北回廊 礎石建ち、瓦葺きの複廊形式の回廊。今回の調査区では、桁行4間分、礎石据付痕跡9基をあらたに検出し、全体で桁行7間、梁行2間分を確認した。いずれも礎石は抜き取られており、礎石を据え付けるための穴（以下、据付穴）と根石を確認した。据付穴は、遺存状況の良いもので直径1.1m、深さ0.2mほどの大きさを有し、下部に根石として拳大の礫を詰める。柱間寸法は、桁行約4.1m（14尺）、梁行約2.9m（10尺）であるが、南から4間目と5間目は桁行約2.9m（10尺）となる。この地点は後述する大極殿後方東回廊との取付部分であることから、柱間寸法を大極殿後方東回廊の梁行に合わせて調整したと考えられる。

回廊基壇は、橙褐色粘質土を版築状に積み上げて造成している。東側柱筋から東へ1.6m付近が基壇土と整地土との境で、回廊の東縁と考えられる。この地点には後述する宮廃絶後の瓦堆積が厚く分布していた。

基壇外装の据付溝や抜取溝などは検出されず、後世の削平を受けてすでに失われたものとみられる。基壇も同様に削平を受けており、東へ向かうにつれて高さを減ずる。

大極殿後方東回廊 大極殿の北32mに位置し、東西方向にのびる回廊。礎石建ち、瓦葺きの複

廊形式で、東面北回廊に取り付く。桁行7間分、礎石据付痕跡11基を検出したが、北側柱筋の大部分は後世に削平されていた。いずれも礎石は抜き取られており、据付穴と根石を確認した。据付穴は、遺存状況の良いもので直径1.3m、深さ0.2mほどの大きさを有し、下部に根石として拳大の礫を詰める。柱間寸法は、桁行約4.1m(14尺)等間、梁行約2.9m(10尺)等間である。

基壇の遺存状況は悪く、その基底部を残すのみである。また、後世の削平を受けて基壇外装の据付溝や抜取溝などは失われている。凝灰岩片が大極殿後方東回廊北側に位置する東西溝2の埋土や、基壇縁とみられる範囲に沿って分布する状況が確認されたことから、基壇外装に凝灰岩が用いられていた可能性がある。

掘立柱塼 大極殿の北32mを東西にのびる柱列。第20次調査で検出していたSA2060に相当し、東面北回廊の西側柱筋から西へ2.6mの地点までのびるとみられる。柱穴は、直径0.7m、深さ0.5m前後の大きさを測り、今回の調査区では第20次調査で検出していた1基を含め、7基を検出した。軸は東へ向かうにつれて北へわずかに振れる。

東門 桁行7間、梁行2間の礎石建ち、瓦葺きの門。今回の調査区では、北妻の礎石据付痕跡2基を再検出した。門の北端に東面北回廊が取り付く。

礫敷 これまでの調査で、大極殿院内庭は黄褐色砂質土の整地土の上に、礫を敷いて整備されたことがあきらかとなっているが、今回の調査区ではその大部分がすでに失われていた。

(2) 藤原宮造営期の遺構

整地土 大きく2層の整地土を確認した。下層は暗褐色土で、最下部に木屑や砂の堆積を含む。上層は黄褐色砂質土である。

南北溝1 東面北回廊東側柱筋の東3mを南北にのびる幅約0.4m、深さ約0.2mの素掘溝。あらたに約13m、計24mにわたって検出した。第117次・第190次調査で検出した南北溝SD9485・SD9461の延長部分にあたる。本調査区からさらに北へのび、第195次調査で検出した南北溝SD11511へとつながると考えられる。

南北溝2 東面北回廊西側柱筋の西約3mを南北にのびる幅約0.9m、深さ約0.4mの素掘溝。南北24mにわたり検出した。大極殿後方東回廊を造営する際に回廊基壇土で埋めている。溝下部には瓦が堆積している。第195次調査で検出した南北溝SD11512へとつながると考えられる。

南北溝3・東西溝2 南北溝3は東面北回廊西側柱筋の西1.5mを南北へのびる素掘溝。東西溝2は大極殿後方東回廊北側柱筋の北3mを東西へのびる素掘溝で、両者は大極殿後方東回廊東北隅でL字形に接続する。南北溝3は幅0.4m、深さは最大で0.3mを測る。北側が最も深く、南側では0.1m程度となる。19mにわたり検出した。東西溝2は幅0.8m、深さ0.4mで、

総長 35mにわたり検出した。大極殿後方東回廊西北隅で鉤手状に折れて西にのびる。東西溝2の埋土は粗砂で、瓦や凝灰岩片が堆積しており、大極殿後方東回廊からの雨水を排水していたと考えられる。

南北溝4・東西溝1 南北溝4は東面北回廊南部の西側柱筋の西3mを南北にのびる素掘溝。東西溝1は大極殿後方東回廊南側柱筋から南3mを東西へのびる素掘溝で、大極殿後方東回廊東南隅でL字形に接続する。南北溝4は幅0.6m、深さ0.2m以下で、南北10mにわたり検出した。東西溝1は幅0.6m、深さ約0.4mで、大極殿後方東回廊西南隅で南北溝5と接続する。東西27mにわたり検出した。上層の整地土によって埋められている。

南北溝5 大極殿後方東回廊西端の据付穴から西1.4mを南北にのびる幅0.5m、深さは最大で0.4mの素掘溝。南北14mにわたり検出した。大極殿後方東回廊西南隅で東西溝1と接続する。調査区南方から続く溝で、大極殿後方東回廊西北隅で西へ折れる。上層の整地土によって埋められている。

南北溝6 南北溝5と同位置を南北にのびる幅0.4m、深さ0.2m前後の素掘溝。南北約10mにわたり検出した。南北溝5を埋め立てた上層の整地土上面から掘り込んでいる。埋土下部には砂が堆積しており、上部には瓦が含まれる。

南北溝7 南北溝5・6の西約1.5mを南北にのびる幅0.3m、深さ0.1m前後の素掘溝。大極殿後方東回廊西北隅で西へ折れる。下層の整地土によって埋められている。

運河 第20次調査検出のSD1901A。調査区西辺部を南北にのび、調査区南辺から北へ4mの地点で東西溝3が取り付く。東西溝3が取り付く部分より北は東側へ緩やかに膨らむ。

東西溝3 幅2.0mの素掘溝。運河に取り付く3m分を平面検出した。運河から東へ15mの位置までのびたのち、そこからL字形に南へ折れるとみられる。下層の整地土によって埋められている。大極殿東側を北へ流れる南北溝SD10801Bにつながると考えられる。

(3) 藤原宮廃絶後の遺構

瓦堆積 東面北回廊基壇の高まりに沿って、大量の瓦が堆積する状況を確認した。瓦の分布は東面北回廊東側柱筋に沿って厚く堆積し、東へ向かうにつれて希薄になる。とくに東側柱筋から東へ1.6m地点では瓦の堆積が密であり、瓦の破片も大型で遺存状況の良いものが目立つ。この地点は東面北回廊基壇の東端にあたることから、宮廃絶後には窪地状になっており、そこに瓦が厚く堆積したと考えられる。また、大極殿後方東回廊の北方でも同様に瓦が堆積する状況を確認した。

(4) 出土遺物

藤原宮期の瓦が大量に出土した。土器など他の遺物は僅少である。

3. まとめ

(1) 東面北回廊から西へのびる大極殿後方東回廊の存在を確認

今回の調査で、従来空地と考えられてきた大極殿院北半部の空間に、大極殿後方東回廊が存在することが判明した。

この大極殿後方東回廊は礎石建ち、瓦葺きの複廊形式で、柱間寸法は桁行 14 尺等間、梁行 10 尺等間で、桁行総長 28.7m、梁行総長 5.8m の規模をもち、東面北回廊に取り付く。東面北回廊は東門から桁行 14 尺等間、梁行 10 尺等間で北へのびると推定されていたが、大極殿後方東回廊との取付部の桁行 2 間のみを、大極殿後方東回廊の梁行寸法に合わせて桁行 10 尺として柱間寸法を調整している。このことから、大極殿後方東回廊と東面北回廊は一連の計画のもとで柱位置を決定していることがわかる。

(2) 大極殿院北半部の様相が判明

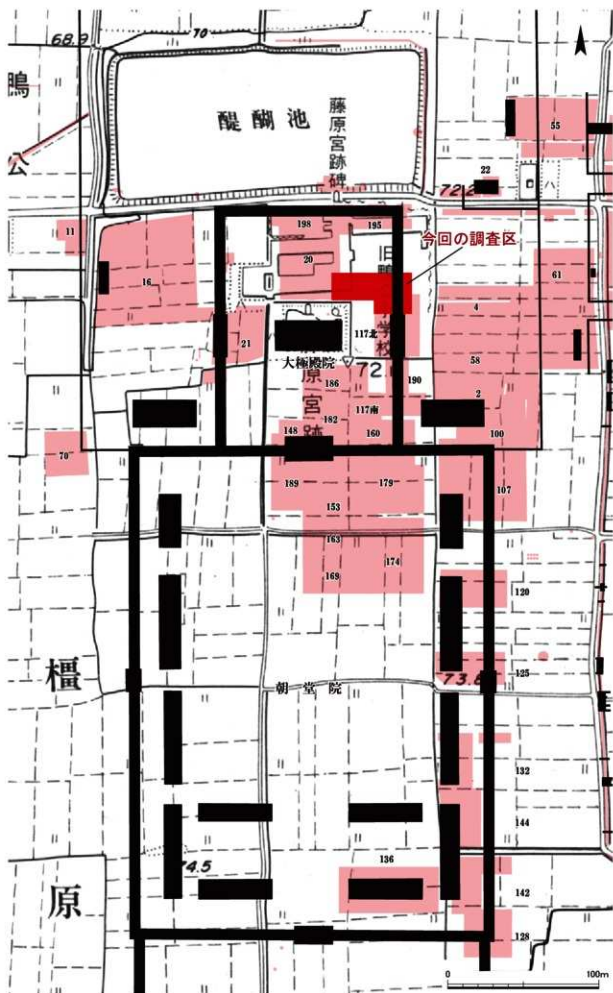
大極殿院の北半部は、東面北回廊とそこから西へのびる大極殿後方東回廊によって画されていたことが判明し、藤原宮大極殿院の構造について、再考を迫ることとなった。

東面北回廊と大極殿後方東回廊の造成には工程差が認められるものの、当初から東面北回廊と一体のものとして、大極殿後方東回廊を造る計画であったことは先に述べたとおりである。また、第 20 次調査で確認していた大極殿北方を東西にのびる掘立柱塀は、これまで性格が不詳であったが、大極殿後方東回廊棟通りに沿うようにのびることから、大極殿後方東回廊と同様の区画施設としての機能が想定される。

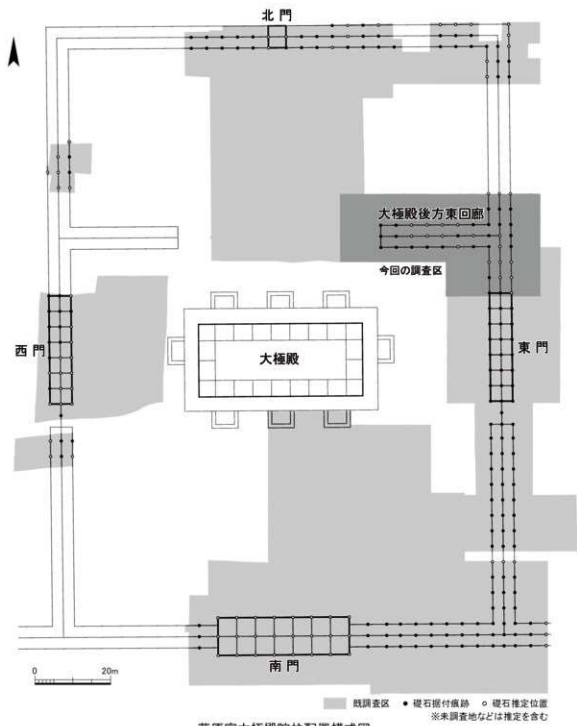
くわえて、各回廊の基壇裾に沿ってのびる数条の溝を確認した。これらは掘込面が異なることから、造営段階の区画溝や建物機能時における排水溝の役割を担っていたと考えられ、大極殿院における造営計画や、造営の手順を復元するうえで重要な手がかりとなる。

(3) 古代宮殿中枢部の発展過程がより鮮明に

今回の大極殿後方東回廊の発見によって、これまで空地と考えられてきた藤原宮大極殿院北半部に施設が存在することがあきらかとなった。この施設は、前期難波宮の内裏を区切る東西棟建物 SB2101 とほぼ同位置にあり、両者の強い関連性が推測される。かねてより、藤原宮と前期難波宮との規模や構造における類似性は指摘されてきたが、今回の大極殿後方東回廊の発見によって、両者の関連性はより強まったといえる。今回の藤原宮大極殿院における大極殿後方東回廊の発見は、藤原宮の構造に関しても新たな知見をもたらせるとともに、宮殿配置の変遷や古代宮殿の発展過程に関するこれまでの議論に重要な問題を提起するものである。



調査位置図



藤原宮大極殿院柱配置模式図